

土 淨

號 月 一 十

昭和十年五月廿日第三種郵便物認可
〔毎月一回一日發行〕
昭和十八年十月廿日印刷納本・昭和十八年十一月一日發行

第九卷 第十一號



安西覺承著

新刊 法然上人の和歌

B 6 版六十四頁 定價五十錢 送料四錢

まことにわが祖法然上人は天成の歌人であられた。そのお歌はどこまでも歌としての美しさに輝く歌である。調子のよさ、格律の正しさ、技法の緻さ——實に立派な歌品であつて、優にこれを當時の一流歌人の勞作に比することができよう。(著者の言葉)

法の歌によく上人御遺徳の結晶をみる。

み詠こそ上人のお姿であり、み教へてある。上人の御作として確實な和歌全部(二十首)について一々懇切な語意、通釋、感想をのべ、金玉の詞花がそのまゝ讀者のものとなる定本である。

發行所

法然上人鑽仰會

東京市芝區芝公園明照會館
總發東京八二一八七番

陸海軍病院 慰問「淨土」應募のお勧め

白衣の勇士に

法味を捧げよ!

◇全國陸海軍病院の全部へ毎月新刊の信仰雜誌「淨土」を贈呈して白衣の勇士に法味を捧げ、大變喜ばれてゐます。

◇一口一圓五十錢の淨財を御喜捨下さい。それによつて一年間毎月雜誌が病院へ参ります。

◇個人でも、團體でも、亦金高が一口以下でも結構です。振つてこの聖き運動に隨喜して下さい。

◇御送金は淨土宗務所事務變部宛に「領收の證」には宗報及び「淨土」の誌上に御芳名を掲載します。

◇多數の陸海軍大臣の感謝狀、勇士からの謝狀がこの意義ある運動の全貌を語つてゐます。

申込所

淨土宗務所

東京市芝區芝公園明照會館
總發東京一五一一一番

第九卷

第十一號

法然上人御法語

一心にもはら彌陀の名號をとへたてまつりて、立居起臥、晝夜に忘るることなく、念にすてざる者を、これを正定の業となづく。かの佛の本願に順ずるがゆへにと申て、念佛をもてまさしくきだめたる往生の業と立て候。



餘

淨土十一月號 目次

表紙・目次カヅト……………牧野 醇

聖典講義 生れる國と造る國……………大野 法道(一五)

慈教庵詣で……………和田 正系(一六)

尊き秋……………吉田 絃二郎(二)

次男高中尉を語る……………伊 藤 壽(三)

不朽の劍の道……………林 東 軌(一五)

とし子を授かる……………岡 本 一 平(一七)

美しき旅路……………代 田 重 雄(一八)

信仰相談……………(三)

歌壇……………岩野 喜久代選(一七)

俳壇……………太田 耳 動子選(一七)

笑話昔咄し集……………(一七)

宗教 隨筆 とんちん物語……………糸 山 天 眞(一六)

實話 身代り地藏物語……………石 橋 德 作(一六)

法語解説 純眞なところ……………中 村 辨 康(一六)

編輯 後 記……………(三)

尊たふと

き

秋あき

吉田 絃 二 郎

夕方ゆふがたになつてから雨が降つて來さうになつたので、急に裏の畑うらの かりに出て、刈り残した粟の穂あはを集めることにした。少し刈つてゐる間に鎌かまを持つ手もとが暗くなつて來た。それでも日が暮れ切るまでには大方刈り盡して、小屋の梁はりに吊るしてしまふことができた。

粟あはに隣りしてペルシヤ麻あさを撒いて置いたが、人の背丈だけ以上に伸びて、大輪の花はなを持つてゐる。宵暗よなぐらの底に月見草つきみ草のやうな色を見せてゐる。今年の秋は幾分麻あさと絲いととでできるであらう。

鎌かまを持つたまゝわたくしはしばらく宵暗よなぐらの畑かりの中に佇たふとんでゐた。一穂ほの粟あは、一茎こきの麻あさも大切に思ふやうになつたこのころの心を尊たふとくも思ふ。

子供こどものころ、父や母に一粒つぶの米を大切にすること、朝夕あさゆふに教へられたわたくし共は、一粒つぶの米を大切に

にしなければならぬことを身にしみて感じてゐた。それは田舎いなかに育つて來たおかげであつた。故郷こきやうの人たちは霜しもを踏んでまだ暗い中に野良のらに出た。そして星影ほしかげを仰いで野良から歸つて來、夜も十二時ちかくまで藁わらを打ち、縄なはを綱なつた。かういふ勤勉きんべんな人たちの生活環境せいふくかんぎやうにはぐくまれた子供たちには一粒つぶの米を大切にすることとは、宗教しうきやう的な信仰しんかうにさへなつてゐた。たゞ一粒つぶの米がいかにか農民のうみんの血ちの出るほどの勤勞きんらうを必要とするかを小さな魂たまひに刻きみつけられてゐたからである。

一粒つぶの米を大切にすることはやがてすべての物を大切にすることとなる。一碗わんの番茶ばんちゃを押しいたゞいて味ふことゝともなる。一碗わんの番茶ばんちゃを押しいたゞいて味ふ心は、やがて一日いちにちの生存せいぞんを限りなく尊たふとく思ふことゝともなる。





一日生きていることのいかに尊いかを知る時、わたくしたちは朝に道を聞きて夕に従容として死ぬることができであらう。

一日の生命にも言ひあらはしがたきほどの尊いものがある。所謂人生は一日に盡き、一刹那に盡きる。聖賢の教へも亦この儼りを語つてゐるに過ぎない。道を求むる心、惴りを見むる心の究竟はこゝに詣る。

菊を作る人の話を聞いたことがある。

菊を作る人は三百六十五日の間一日の休みもなく菊のために細かな心づかひと勤勞とをさしづける。花の散る刹那から始まつて花の開くまで一日の休息もない。しかも菊花の眞實の見頃はたゞ一日に過ぎないといふことである。

菊を作る人たちはたゞ一日のために三百六十五日の勤勞と苦心とをさしづけるのである。

人間も亦菊作りに似た勞作と工夫を凝らしてゐる筈である。昔の武士は敵に笑はれないほどの見事な討死を遂げたい一念のみに生きて、生涯の修行を怠らなかつた。かれ等は死の刹那のためのたしなみに畢生の修養をさしづけた。

大往生を遂げたいといふたゞ一念のために古人はその生涯を念佛の修行にさしづけた。

よく生きるといふことは大切である。しかしよく死ぬることも大切である。よき死に方を覺つてこそ、よき生き方はできる。今日討死、今日討死といふ覺悟の下に生きてこそ、よき生き方もできる。

×

或る若い女客の話を聞いた。

「先日赤飯を炊いて學校のお辨當に持たせてやらうとしましたら、子供に叱られましたよ。このころの子供たちは、おさつだの、馬鈴薯だのですと大威張で持つて參りますよ。」

この若い母親の言葉の裡にも尊い時代の鼓動を感じてゐる。國民學校にはいつたばかりの子供たちでも大人以上で時局をわきまへてゐる。

「このころは子供たちは玩具を買つてくれともお菓子とくれとも言ひません」若い母はかうも語つてゐた。ぐつと胸に迫るものがある。尊い子供たちの姿が映つて来る。大人たちの中子供たちの賢さの前に己れを耻



ぢなければならぬ人がないであらうか。

×

防空壕の掩蓋に土を盛り、芙蓉を植ゑて置いたが、このころでは毎朝楚々たる淡紅の花を見せてゐる。

朝毎に咲く芙蓉を眺めてゐるといかにも靜かな秋である。

しかしそれは極寒の大陸や遠い海洋に戦つてゐる人の日夜をかけての尊い犠牲を思ふことなしには得られない靜かな秋である。

朝毎に防空壕の上に咲く芙蓉を見るごとにかくて靜かな秋に生きることの勿體なさを思ふ。

×

戦さはいよいよ背烈になつて來た。敵の反攻はますます近接して來るであらう。かういふ場合には人間の偉大さと、弱さといふものが一番よくはつきり區別される。六百六十餘年前蒙古の大軍が押し寄せて來たをりの北條時宗の態度は何うであつたか。圓覺寺開山の祖元禪師は時宗の追悼辭中、

急告！左の書籍は品切れとなりました

中村辨康著

日常勤行式講讀

品切れ

法然上人鑽仰會編

念佛讀本

品切れ

中里介石著

法然上人傳

品切れ

佐藤春夫・吉田絃二郎・岡本かの子・倉田百三・郁芳隨園著

我が信仰

品切れ

「看よ他國を治め天下を平定し、喜怒の色あるを見ず、矜誇街耀の氣象あるを見ず。此れ天下の人傑なり。自如たり、弘安四年虜兵百萬博多にあれども略ぼ經意せず、但毎日老僧を請じて諸僧と與に下語し、法喜禪悅を以て自ら樂めり云々」と述べてゐる。わづか十八歳の時宗であつたが、あの國難の重荷を一身に擔いつゝもかれは靜思打坐の日課を怠らなかつたことが知られる。



熊谷蓮生坊は勇躍して戦場を馳驅した。しかもかれは黒谷に駈つけ、往生の一念に靜居するほどの半面を持つてゐた。源平兩家を通じて英雄雲のごとき間に在つて、念佛僧蓮生坊一人がとりわけてわたくしたちの心に迫るものを持つてゐる理由を考へなければならぬ。

×

今年は九月の三十日にはじめて庭に青鸚を聴いた。薄曇りの空の下に青鸚は終日靜かに梢から梢を移つて鳴いてゐた。

わたくしは庭に下りて行つた。いつの間にか粟も落ちて、笑み割れた穀のみがころがつてゐた。茶の花も咲いてゐた。水引の花、鶏頭の花も咲いてゐた。

わたくしは數日前、逢つて別れた少年兵の倅を思ひ出し、庭に立つて青鸚の聲を聴いてゐた。

「最初入隊した時、はじめてお前たちは死ぬ覺悟ができてゐるか」と問はれた時は、水でもかけられたやうにぞつとしましたが、今では生死なんて問題にもしてゐません」

とかれは朗かに笑つてゐた。
尊い秋ではある。

展覽會でお賽錢をあげる

上野美術館で催されてゐた新制作派展にはガタルカナル島で散つた故高橋英吉氏の作品二つ——「聖觀音像」ともう一つは米軍の強襲下でガ島の名も知らぬ木の根に彫りつけたといはれる「不動明王像」とが出陳されてゐた。同展の終日近い十月三日、四日のこと、參觀者のうちには右遺作の前にお賽錢のつもりだらうか五錢十錢とお錢が幾つも重ねられていつた。今までの美術展では例へ佛像が出陳されてゐてもかかることがなかつたもので、この新風景に故人の藝術道を讀へて感激してゐる人が多かつた。また十月三日から軍人援護強化週間が始つてゐたので、そのためだらうといふ人もあつた。しかしたとへ美術展であつても、故人の冥福を祈るとか、佛像に對しては拜むといふ氣持から自然とこうしたことになつたと見てもよいであらう。拜む心、合掌する姿、ここに云ひ知れぬ人の美しい姿を見出す。こうした和やかな尊い心を今後ますます旺んにしたいものである。



慈教庵詣で

醫學博士

和田 正 系

眞夏の日光がまだ烈しく照りつける八月初めの午後だつた。

鷗沼の停留場に下車すると、私は直ぐ近くの家で訊ねてみた。

「本眞寺といふお寺へはどう行くのでせうか」

「……」

知らない様子だつたが、念の爲めもう一度問うてみた。

「慈教庵とも云ふのですが……」

すると直ぐ答へがあつた。

「あゝ、あの尼寺ですか。それなら分ります

と丁寧に教へてくれた。道はいくらも無か

つた。別荘らしい家が兩側にあるところを通りぬけると畑になる。暫くすると左手の松林の中に擬寶珠の二つ並んだ大きな屋根が見える。それが尋ねるお寺だつた。氣をつけて見ると路ばたに「慈教庵」と刻んだ小さな石の道しるべも立つてゐるのであつた。

慈教庵の名を聞くのは久しかつた。一度参詣したいと思ひながら機會も無くて過ぎたが、今年は佛縁に恵まれて、この寺の開山である本眞老師命日といふ日に來ることが出来たのである。然もこの日は又私の父の命日も當つてゐるのであつた。

秋、すゝきの涼しさに繁つた植込を抜けて支關に訪ふと、取次に出られたのは灰色の

衣を着た未だうら若い尼さんであつた。端正な態度と慇懃な挨拶の言葉に感心した。

私を招いて下すつた安藤さんは既に千葉から來て居られた。西日はさしながらも涼しい風の通ふ二階の一室で私は開山の本眞老師のことや、このお寺の開基の由來を詳しく伺つて、感激を新にした。

夏の日も既に傾いて來た。

廣い境内は物の音も聞えぬ静けさである。涼しい風がしきりに吹いて來る。

私は唯一人、廣々とした部屋に坐つて遠近に見へる本堂の屋根の擬寶珠を見つめてゐた

屋根の上に並ぶ擬寶珠のかげ見れば暑き日ざしも夕づきにけり

その中に夕方のおつとめであらう。本堂から木魚の音が聞えて來た。廣いお寺の夕べの空氣をふるはして高く低く響いて來る木魚のおと。眼をつぶつて聴けば直ぐ身近に鳴つてゐるやうな氣もするし、又遠く遠く、十萬億佛土の彼方から響いて來るやうな氣もする。宗教的の行といふものは何といふ感じの深

いものであらう。たゞ拜むだけでは足らない。木魚を叩きお念佛をする、あの古めかしい行をしてこそ、しみじみと佛を見ることが出来るのである。

慈教庵、正式には夢想山本眞寺の本堂は一寸類の無い見事なものである。これは建築を云ふのではない。又見事と云つても決して唯きれいとか光つてゐるとか云ふ意味ではない。本尊阿彌陀様の端麗にして且つ氣品高く、又莊嚴も頗る之にふさはしいことである。氣品高い極彩色は、尼寺として如何にも相應しい。又本尊様と莊嚴との調和も非常に良い。金のかゝつて居るお寺は多いが、しみじみと宗教的精神のにじみ出て居るお寺は決して澤山無いのである。

書院で大島大僧正におめにかゝることが出来たのは嬉しかった。精進料理を御馳走になりながら、いろいろお話を伺つた。暗示の多い、味はひの深いお話はいつ迄も私の耳に残つてゐる。矢吹博士のすばらしい藏書はこのお寺の寶物である。閱覽に來る學道の人々に

對する故博士のこまかい御心遣ひを知つて私は涙の出る程有りがたかつた。この法施は永久に世人を救ひ感謝されることであらうと思ふ。私は不思議とも思はれる佛縁の縁をたぐつてそれからそれへと想ひめぐらして居た。めまぐるしい日々の生活を離れて、一刻でも念佛と木魚の中に暮さして頂く。平生は難用に追はれ追はれて、おちついて考へることも出来なかつた反省をしみじみさせて頂けるのを此の上なく有りがたいと思ふ。

俳壇 太田耳動子選

朝鮮 三浦砂千子
虫の音の常となりけり夕暮るる
名古屋 堀場のりを
月天子稻架の襖に静もれる
高崎 大塚 光高
月出でて雲美しくなりけり
和歌山市 松尾 遊月
順調に二百十日を迎へけり
東京都 田邊 越山
常にゐる御前に來し彼岸かな
舞園 齋藤 耕善
豊の秋大さ 戰憂なし
岐阜縣 立木 眞哉
秋雨に飛ぶ飛行機をおろがめる
名古屋 鶴田 稻眞
屋根たゞき落ちたる柿と龜ふた
つ
大阪 豊岡 青生
すぐに切る西瓜たゞいて見る子
かな
京都 今江 嵐舟
稻妻に向ひて夜の汽車迅し
名古屋 相馬あい子
風鈴や氣輕な醫師の長ばなし

北海道 花田 順往
豊年の便り戦地に送らばや
栃木 大輪 清
雲間より月見る空の青さかな
小樽 中村 もん
廻廊に佇つ静けさや水の秋
岡谷市 久保田 穰
合掌の東の間秋はそと來ぬる
東京都 井原しま子
朝顔のきそへる今日もまた樂し
京都市 福島孝治郎
薇のたけしが搖ぎ柘榴の驛
豊中 三好 夏生
奉る芒の影を得て静か
名古屋 宇佐美研阿
戦へる國靜なり蟲の聲
高知縣 竹原 教圓
雲影のわたり行くなり稻の原へ
今治市 三木 光子
われかつて住みたる里の大出水
岩國市 長岡 白朝
肩先にこはばる秋の拾かな

投稿定規
官製ハガキ一回二句
以內、雅士相親部併
送保宛に送ること

美しき旅路

代田 重雄

榛名神社の参詣をすませた私は今、湖畔のバスの停留所でバスの来るのを待つてゐる。待つ間に乗客はふえて、凡そ五十人位になつてしまつた。

歩け、歩け、あるけ、あるけ——

すると「歩く歌」をうたひながら山の方から國民学校の男女の生徒が大勢、バスを待つてゐる私達の方に向つて歩いて來た。それは榛名神社で巫女舞を無心に觀てゐたさつきの生徒達であることが分つた。

歩け、歩け、あるけ、あるけ——

生徒達は疲れた様子もなく、元氣にうたひながら私達の前をゆき過ぎやうとしてゐる。

持つてゐる日の丸の旗を打ち振りながら、頬笑んでゆく生徒もあつた。果然とバスを待つてゐる乗客は一樣に皮肉めいたものを感じ、誰の顔にも苦笑がうかんだ。子供達でさへあして元氣で歩いてゆくのには、わずかに二キロ位な道をこんな大勢して時間を無駄にして、

バスの来るのを待つてゐる——私はそう思つた。すると突然長い列の一番先にゐた國民服の紳士がグルリうしろにふりかへると言つた

「皆さん、どうです、歩きませう、ご賛成の方はありませんか、今子供達の歌つて行つたあの歩け、あるけの歌を聞いて何んとなく大人の私達ははづかしくなりはしませんか、皆さん、歩きませう、たつた二キロ位平氣です、すぐです、歩きませう、」

紳士の言葉は眞面目な熱にこもつてゐた。

「賛成、々々、歩きませう」

皆相談したやうにこの紳士の提唱に一人のこらず賛成の意を放つた。そして、列をくずすと皆紳士を中心とする格好で集つた。忽然と集つて來た共鳴者に紳士はやゝ面映ゆ氣に顔を赤らめながら言つた。

「では、参りませう——」

五十人ばかりの男女はやがて、紳士を先頭に元氣よく歩きはじめた。何んといふ和やかな情景であらう。歩調こそみだれてゐるが、誰も歩くことの心良さをしみ／＼と味ふのであつた。

中から木魚の音が聞えた。顔を洗ひに行くと洗面所には、朝露もしとどな月見草や河原撫子や木通の枝を手折つた尼さんが歸つて來られた。私の頭には忽ちあの「大原御幸」の中の美しい文が浮んだのであつた。ふと氣がつくと、洗面所の壁に書いてあるのである。

以水洗面 當願衆生

得淨法門 永無垢染

以水盥掌 當願衆生

得清淨手 受持供法

借りたと思つたが、お寺には櫛も鏡も無いのであつた。私は身の引きしまる思ひがした。これだけで慈教庵の甲斐があると思つたのである。

二階に上らうとすると階段の柱にかう書いてある。

上昇樓閣 當願衆生

昇正法樓 徹見一切

このお寺は非常に戒律がやかましいとのことである。お掃除のよく行届いて居ることや一切のものが實に整然として居ることや又尼

「土地の人達が利用してゐるバスの、旅の吾々が皆して占領してしまつては、土地で働く人達にすむまい」

「そうだ、そう

だとも」

誰やら力をこめて言つた者があつた。

やがて、生徒達の群に迫ひつくと「わーい、／＼」と生徒達は喚聲をあげて私達を迎へた。列の中ごろにゐる男女の先生も手を舉げて私達を迎へ、頬笑んだ。日の丸の旗が高くあちこちから上つた。そして私達も生徒と同じやうに歩け、あるけ——と聲高く歌ひ、元氣に歩いてゆくのであつた。砂塵が白く立ちこめた中を、私達は手を振り、胸を張り、自分達が大人であることも忘れ、子供達と同じ氣持にとけ合つて闊歩してゆくのであつた。

約二キロ——山上のケープルカーの驛のそばまで歩いて來てしまつた。腰から下は白く



砂塵によこれ、誰の顔にも疲勞の色が濃かつた。しかし、生徒達と共にしたこのわずかの苦樂の中に、お互ひに満ち足りた悦びがあつた。

「ご氣味よう、さようなら」先生が言ふと、生徒達も「さようなら、／＼」と口々にかう言つた。

「しつかり勉強して下さい」私達もそれにこたえるやうに口々にかう言つた。そして、期せずして「萬歳、々々」といふ聲が元氣にわき上つた。

今日本は有史以來一とほりではない大戦争をしてゐる。吾々は自分勝手なわがまを捨てて、お互ひが心一つに協力してゆかなければこの大戦争に勝つことは出来ない。だが、何んといふ頼しさ、心強さであらう。この心の美しさ、正しいと思ひ、良いと思つた事には忽ち自分を捨てて相和し、嬉々として誰も一時の苦痛に堪えてゆく。この心あつてこそ、日本は強いのだ。

私はこの戦争が如何に長くつゞかうと必ずつつと思ふ。

さん達の立居ふるまひが嚴格なこと等を見ても如何にもと思はれる。これも開山の本眞老師の遺風であつて、われ等後人を感じせしむること多大である。

戒律の中にこそ宗教がある。戒律無くして何處に宗教が有らうか。破戒無慙の徒にして人の救済なぞ出来るものではない。われ等は法然上人を讀してはならぬ。

本眞老師はか弱い女の身でありながら男も出来ないやうな仕事を残された。それは殆んど人間業とも思はれない。布施樂の體化、活き佛様とあがめられたのも當然である。八十四年の清き一生は一切が人の爲めに捧げられたのであつた。その老師は世にも稀れた持戒の方であつた。

このか弱い尼さんの事績を聞く時、われ等は眞に佛様の滅びざる力を信じ、且つ之を信ずる悦びに満されるのである。

ふるき世のいましめかたく守り來てみほとけの道ここにありけり

とし子を授かる (三)

……再婚後の問題なほ一つ……

岡 本 一 平 (文と畫)

私の家では息子はすでに成人し、私の貰つた若き後添へとほど同年である。それで義母に當るこの女を息子は「子さんと子づけに」して呼び、距てなく附合つてゐた。異腹の妹に當るいづみを自分の子のやうに可愛がりおもちやにしてゐた。彼がもしや、早期の結婚をしたならこのくらゐの子どもはできてゐる筈である。彼はいづみを生れてから九年の間、盗くり可愛がり、そして出征した。

かういふ具合に、私の家庭では先妻の子と後妻の間柄、異腹のきやうだい同志の間柄に係るいざこざは無い。これはその當人たちの年齢や性質の關係からで、偶然にも家長の私に心を勞せさせなかつたに過ぎないのだが、

あらふ。
まして今日は決戦態勢下の日本である。國に住む誰一人、國力増強の一員として頼むべき味方である。憎むはたゞ米英側に向つてのみである。この情勢を辨へず、いたずらなる感情を一家内の如きに恣にするものあらば、邪魔な閑人である。説いて勤勞奉仕に出でしめよ。

話を次に移さう。

さて、私の貰つて來た娘は八重といふ名であつた。小柄の女なので私は彼女を呼ぶのにいつか八重ちと呼ぶ慣はしとなつた。お八重の小さいやつといふ意味を煮詰めたものでもあらう。まさか私ぐらゐの年頃になつて妻を呼ぶのに「八重子や」でもあるまい。

彼女の方からは私のことを「センセイ」と呼ぶ。それすら元來無口で恥かしがりやの彼女は餘程のときでないと唇に出さない。上の女の子が生れた。覺束なくも利き出した口にやはり私を「チエンチエイ」と呼んだ。私

等の職業のものにとつて「先生」といふ言葉は普通の代名詞に近いもので殊更、特別の感じはない。これをおさな子が口にしてもたゞいたいけに物言ふものぞとほく笑まるゝばかりであつた。しかし若き母親として生れた子に父を呼ばしむべくもつと世間並でしかも血の通ふ呼名で呼ばせたかつたのであらふ。彼女はおさな子を膝元に寄せひそかに「オトウチャマ」といへと教へてゐた。私はこれを知

に上すであらふにと。おさな子はつひに私を「オトウチャマ」と呼ぶやうになつた。私は多少、異様な氣持と責任を一層深く感ぜざるを得なかつた。私等は今年も青年時を経て來た學校の同級生の會合をやる。出席者中、嫁入りさした娘等を持つ綴友などはもはや二三人の孫を握へ、それ等に「オヂイチャマ」といはれてもなに珍らしがらぬ様子らしい話題を互に交はしてゐる。私ひとり冒險を新に人生

いづちやん
かいだして
お尻を
叩かれ
ても
買けん元

叩かれたあとを
自分で撫で、「お尻
の愛しい」

ゴケ

一歩



あみちゃん
けふは
「オマニッケー」
「アイヨハジヨウズ
オヤ」
一向程

つて何か涙ぐましいものを覺えた。彼女が年頃に似合ひの良人を持つたなら良人を呼ぶに何の躊躇もなく、また、子は教へずとも自然と父へ親し氣な呼名を唇

双六の賽を再び振り出した感が深い。さもあらばあれ私はかの子女史と同座で苦修し擱んだ永遠の若さと生死を貫くいのちの信念に於てこれ等身上の責任は些々たることと將來必ず展開すべき大東亞文化建設のため日本の藝術家として責任を果し抜く意氣では青年の如くに燃えてゐる。

なほ頼母しいことは八重ち彼女自身年の距たりのある再婚を決して意に介してないことだ。彼女は零落した三河の舊家の出で、七つの歳に父に訣れ、それから母親と多くのきやうだいたちと生活の苦勞をして來た。自家で小工場を經營したとき、女工さんともなつて働いて來た。

服裝の名利や、浮ついた甘い感情には全くうかさぬシンを持つてゐる。家中にあつて、力強い味方だ。長男は前線で戰つて呉れてゐる。

幸に二人のおさな子も丈夫で手を焼かせない。いざ／＼一家を擧げてお國の資材とならふ。



次男高中尉を語る

伊 藤

壽

海軍技術中尉伊藤高が責任感から自戕して果てたことに對して、海軍葬の禮を以て送られたといふ榮譽については唯々感激の外ありません。力及ばなかつた高の遺志を繼いで、われわれも亦全力を盡して御國のため御奉公致したいと決心してゐる次第であります。

高がまだ幼少の頃は、私も親として可愛がることが出来たが、小學校に入るやうになると私が醫者である悲しさから殆んど子供の世話をみる機会がありませんでした。それは子供達の通學と、私の往診とがいつも一緒にさせなかつたからです。夏になつて海水浴に連れて行つても、いつも海岸に着くのが夕方になるといふわけで、一緒に水に入ることも出来ませんでした。

從つて高と一日中共に暮したといふのは、富士登山をした時、大島に遊んだ時の二回しかありません。斯様に父としては高に直接訓誡を與へ教育する機会に恵まれなかつたのですが、しかし高は父から特に叱

られるやうな事は何もしなかつたのです。高は幼少の頃から無口できかん氣の子供でありました。習字の塾に通つてゐた時も他の子供たちが皆歸つてしまつた後まで、高は残つて氣のすむまで勉強してゐたと先生がよく語られてゐました。學校に入つてからも成績は大體良い方らしく、小學校から中學校まで級長で通してゐたし、東大卒業には工部賞を授與されてゐました。小學校を終えて東京高校の入學試験を受けた時も、受験當日に運悪く四十度の熱を發してゐたのですが、それでも平氣で試験だけは受け、私は高が歸つてきてから高熱のあるのを知つた始末でありました。勿論試験は失敗しました。

二高に入つてからは蹴球部で活躍してゐた



伊藤中尉のこと

伊藤高申尉は東京都牛込區東五軒町二六番地伊藤壽氏次男に生れ、東京府立第五中學校、第二高等學校を経て昭和十七年東京帝國大學を卒業し、直ちに海軍造機見習尉官を命ぜられ、本年一月十五日中尉に任官、七月以來吳海軍工廠造機部勤務を命ぜられた。

嚴父壽氏は二本松藩士の出で、陸軍軍醫として日露の役には病院長をつとめた。母堂毎子さんは藤田東湖の孫にあたり、忠君の血を受けついでゐる。又同家の内、長男豐氏、北支に出征中、長女光子

やうですが、當時の手記によると、學生が運動をするのは困苦缺乏に耐へ、眞の人間となるためであつて、普通の身體を持ちながら若い者が談笑に時を移すのはいけないと云つてゐます。一學年に進んだ時、同校の寄宿舎明善寮の會計幹事を命ぜられたが、その時の決意を記して、幹事は一個の事務員になつては

さんの嫁いだ石井秀男氏は軍醫として軍陣にあり、その他に妹西子さん克子さんがある。

職場も前線も同じ職場である。職場に散るも職場に産れるとともに盡忠のみである。軍の緊急工事の進捗が思ふやうに運ばぬと伊藤中尉は八月廿九日自刃した。中尉は十日間に互つて固く決意し、身廻り品に送り先の名札までつて從容と死についた。この敵撃滅のとき己れを滅した責任感に決戦に勝ち抜く生産戦の氣魄でもある。この自決に對し九月十七日吳鎮守府に於て海軍葬が執行された。(寫眞は伊藤中尉)

ならぬ、寮の最高指導者として精神的指導こそ最大の任務である、この重大なる任務には身を挺して當るべきこと等が云つてゐます。

矢張りその頃、後輩の入學受験者を激勵しようとう「玉碎」の二文字を大書して食堂に掲げたことがあります。その他すべてのことに高は自分から進んで困難に當らうといふ氣質が

ありました。人の嫌ふ事を好んで引き受けたる風がありました。食堂に掲げた「玉碎」の二文字こそ當時からすでに高の奉ずる信條であつたやうであります。

私は八月二十九日には、この日をアツツ島勇士の命日として家に弔旗を掲げさせておきました。私の氣持を知らぬ近所の人は、英靈がお歸りになるのですかと質ねた位で、私はアツツ島の勇士をしのんでゐることを説明したものでした。ところがこの日、はからずも吳にゐる高が自刃して、アツツ島勇士をしのぶ弔旗が高に對する弔旗になつてゐやうとは夢にも思はなかつたのであります。思へば私の家だけ弔旗を掲げてゐたことも不思議な縁だと思はれませう。

吳から電報を受取つた時には、私は高はすでに命がないのだと直感しました。しかし吳に馳けつける列車の中で、若し潜水艦にでも乗つてゐて洗んだものなら、或ひは海底で引揚げ作業を待つてゐるかも知れない等と、親

らしい愚痴を考へないわけにゆきませんでした。所が呉について、高の友人らしい人から疊の上での殉職ですと聞かされ、ハットした私はすぐにそれではこれですかと、「切腹」の真似をして貰いました。するとその人はすぐ「さうです」と答へてくれました。私は槍一すじの家に生れて唯武道を取かしめない立派な死方をして欲しいと、そればかり考へてゐたので、高が切腹したと教へられ何んとなき氣が輕くなつたやうに思ひました。

妹、酉子が清書した軸、身體髪膚受之父母、不敢毀傷孝之始也。立身行道、揚名於後世、以顯父母、孝之終也。を掛けた部屋で、軍装に身を正し、身の廻り品は全部キチンととりまとめてから座蒲團に正座し、腹一文字に割腹し、八月二十九日午後九時頃二十六歳の生涯を終えたのでありました。近くの部屋におられた方々が高の最後に氣がつかかなかつたといはれるのも、高が古武士を偲ぶだけの態度を以て立派に死んでくれたに相違ない

と、私は嬉しく思つてゐます。

高が何も死ななくとも、生きてますます御奉公した方がよかつたではないかと、云はれる人もあります。しかし親への遺書にも茲十日程の間に決意したとあり、大東亞戦の生産戦に倒れたものと思つてくれとあるので、私は高の決心をそのまゝ受け納れ、これが最も正しい道であつたのだと信じてやつてゐます。自刃の前には連日日夜を分たず仕事に没頭し、その努力に促進されてか、改善の運びにあつたといはれてゐます。しかし、かつて

東京水交社で某先輩から首途の祝ひに、「技術科士官は腰の刀にかけても職責を完遂せねばならぬ」と激勵されたその言葉の通り、腰の刀で己が責任をとつたのであります。

高が入隊する際に記した文に、米英撃滅に ついての決意が述べられてありますが、この決意を生産戦の部門に果し、己が命をかけて敢闘したものと思つてゐます。高の同僚の方がお見舞ひ下され、私に向つて「伊藤にす

まぬ、伊藤に教へられた」といつて下さつたのは、私として他にこれ以上嬉しく思つたお言葉はありませんでした。これら同僚の方々は、何れも立派な士官ばかりで、高の自刃に對しよく理解されて下さつてゐると思ひ、何も高の死によつて今更教へられるやうな方々でないことは疑ひないのですが、こうしてお見舞ひ下されると、私はこれらの方々が何んだか高の分身でもあるやうに感ぜられ、高もまだ生きてゐるのだと思はれたことであります。

しかし高は己が責任をとつて自決したので、この一中尉の自決に對して海軍葬儀を執行せられたことは全くの異例であります。尙そればかりでなくあらゆる事が異例につぐ異例を以て遇され、私としては何んと申してよいやら感激の外言葉もあります。私は期せぬ多くの方々から色々のお言葉を頂戴いたし、地下の高もさぞ御厚恩に深謝いたしてゐると信ずるのであります。



歎 佛 偈 講 義 …… 一五 ……

生れる國と造る國

大 野 法 道

十方より來り生れんものは心悅清淨にして

之は第十七偈の前半で、淨土の五つの徳を擧げる中の第四である。こゝには、淨土は人々が生れてゆく國であると説いてあるから生れる國について考へてみる。

そのよき例はわが日本である。

日本人はわが國の尊嚴無比なる國體に感激し、全身全靈をお國のために、さゝげる心持ちを持たぬものはないのであるが、それは畢竟國よりこのかた、すべての日本人が住んだ世界であつて、我々は今そこへ現に生れつゝあるのである。

生れゆく國はどこまでも生きる。日本の強いのは、一億國民が絶えずそこへ生れてゆくからであつて、どこまでも生きてゐるところにある。かの米英諸國のやうに個人主義で、各自が別々に造りだし

てゐる世界から成る國でなく、神武天皇の古へに於て一たび肇められた一君萬民のこの國は、世々に天皇のしろしめし給ふところであり、よろづの民草は常に大御心を奉載して、盡忠報國の生活を以て、先祖已來つねに一つの所へ生れてゐるのである。

個人が造り出す別々の世界の集つた國は、縦にも横にもばら／＼で本當に一つのものになつてゐないから、眞に續く力がなく、強いものが出て來ない。

この偈に、「十方より來り生れんものは」とあるのは、解脱の世界としての淨土も、また同じやうに人々の生れゆく國であることを、明らかにせられたのであつて、之が阿彌陀佛の淨土の特色である。かくて淨土はすでに佛の成就したまふところであり、佛を信する人の生れた所であり、苦の人生にあつて、わづらひなく暮してゆける心の置きどころとなつてゐる。

二

ところが、日本人といへども人間であるところから、まことに醜いことながら、我がまゝな私心が、時々顔を出してくる。もとよりお國に報ひる一心は不變であり、不動であるが、日常の小さいことには、自分に都合のよいやうに取り計らはうとする、貪・瞋・癡が顯はれやうとする。

さうした我まゝは心のけがれであるが、現時の如き決戦下の、一億の民草が一齊に敵の米英撃滅の一念に集中し、増産防空の一途を辿りつゝある時に於てすら、人々の私生活にあつては、全く無くなつてゐないばかりでなく、農家への買出し部隊やその他いろいろの事が、他人のことでなく、自分を省みて、之では相濟まぬと思はれるやうなことのない人が幾人あるであらう。

何の混りけもない蒸溜水から、人間の體力は得られるものではない、鹽分や鐵分、その他いろいろの物の溶け込んでゐる、天然の水こそ大切である。

そのやうに、愛國報國の力強い心は、貪・瞋・癡から全く別のものではなく、人間の持つありのまゝなるものを、すべてお國の爲めに振り向けるところに固められるのである。かくあつてこそ、人の全身を擧げたる「撃ちて止まむ」の力強さが具はるのである。今、淨土に生れる心が悦びに満ちた淨き心であることを、「心悅清

淨にして」と説かれるのであるが、その淨き心は醜い心の外のものではなく、その中から出るものであると、法然上人は申されてゐる。たとへば草のしげき池に、十夜の月のやどりたるは、よそにては、月やどりたりとも見えねども、よく／＼立ち入りて見れば、葦間をわけて宿るなり。妄念の草はしげけれども、三心至誠心・深心・廻向發願心。淨土に生れる心の月は宿る也。

三

上人の法語の中に見える三心は、淨土に生れる淨き心として、觀・無量壽經に説かれるもので、淨土の教へでは極めて大切な心とするのであるが、實は何事も之なくして成就することは困難であらう。

陸海軍病院「慰問淨土」寄附者芳名(敬稱略)

- 五圓 東京都本郷區駒込神明町三〇五 田中文字
- 五圓 福島縣南會津郡伊南村善導寺坂 馬場せん 星リノ
- 三圓 酒井秀吉 山内運作 渡邊熊太
- 三圓 兵庫縣水上郡柏原町 中川鈴
- 三圓 埼玉縣松山町松山 城恩寺
- 二圓 佐賀縣神崎町 八谷彌吉
- 一圓五十錢 桑名市清水町 五井とよ
- 一圓五十錢 釜山府東大新町一ノ一七二 勝見兵太郎
- 一圓五十錢 兵庫縣水上郡國領村棚原 荻野公平
- 一圓五十錢 臺北市幸町一三五 金山ミツ
- 一圓五十錢 東京都江戸川區春江町四ノ三 内山けい
- 一圓五十錢 同牛込區矢來町三五 長岡玄三郎
- 一圓五十錢 敦賀市神樂九四吉川汀巖
- 一圓五十錢 和歌山縣粉河町皆乘寺坂 井上クニ子
- 一圓五十錢 同皆乘寺坂 高谷靈明
- 一圓五十錢 東京都蒲田區女塚町 欣淨寺
- 一圓 福岡縣八女郡水田浦町 近藤ハル

歌壇

岩野喜久代選

兵庫療養所 前川 泰三

目に遠き山の重なり際立ちて雲居

しづかに秋立つらしも

評 療養生活の中に灼熱の夏は過

ぎて秋のけはひが感じられた。

その驚きを歌つたものだが、し

づかな落ついた調の中に作者の

感動の深く盛られた佳作である

横須賀海軍病院 砂塚 貫一

君がため捨つる命を永らへて病む

窓に見るこの秋の月

評 前戦で死ぬべかりし身を永ら

へてかうして内地の秋の月を見

てゐることよ、さまじい感

懷をこめて、餘情深し

北海道 花田 順往

南無阿彌陀はとけまかせの我が身

には生き死にともに心やすけれ

評 達人の境地ならん羨し生死に

私なければ自由無碍にして天馬

空を行くごとく積極的生活を營

みたまへるなるべし

效帳に月見てあれば

別府海軍病院 吉本喜代三

母上の神詣でますみ姿を夢にわれ

見て病む床に坐す

佐賀市 副島 徹

みいくさに征きし子のため老いし

母二里の山路を裸足参りす

山口縣 下松 勝満

何ことも捧げ盡して大いなる國の

力を築きゆかまし

東京都 小山 しづ

岩間縫ふ清水にぬれてむす苔のう

す紫の花を持ちたる

小 樽 中村 茂舞

つぎつぎに耕されゆく段畑にむら

かり咲ける馬鈴薯の花

京都市 福島孝治郎

還らじと心にきめて征きし子の一

時歸還に我を疑ふ

熱海市 瀧澤 菊露

初柑子ちぎりにかたき皮むけば爪

にみどりの強き香をする

第一の至誠心は眞實心で、眞劍になること。

第二の深心は尊ぶものを何處までも信ずること。第三の廻向發願

心は目的とするものへ、すべてを振り向けることであるから、之は

宗教だけのものでなく、何事によらず物事を成就するに、之なくし

てはかなはぬものである。

大東亜戦争は言ふまでもなく、長い間、東亜を喰ひ物にしてゐた

米英を追ひのけて、東亜本来のあるべき姿に立ち歸らせ、日本が本

具する八紘爲宇の大精神に基いて、其榮の強健なる天地を形成せん

とするのであるが、この大東亜は造る國でなく、生れる國であらね

ばならぬ。なぜといふに、大東亜が成り立つのは、完全に日本の力

に依るのであるが、日本はこゝに新らしく之を造り出さうとするも

のではなく、實は羣國のはじめより、この力をもつてゐるのであ

り、八紘爲宇の大精神の廣く天地は成就されてゐるのである。たゞ

それが形の上に顯はれなかつたのが、今こゝに時期到來して、大東

亜として生れることとなつたものだからである。

これでこそ大東亜は強力であり、何物といへども、之を破ること

はできないのである。しかも、國々は今現に三心を以て大東亜に生

れつゝある。即ちすべてが一生懸命であるのは至誠心、日本の大精

神にどこまでも信頼するは深心、すべてを擧げて必勝に集中するは

廻向發願心である。まことに強健なる國は、造る國でなく生れる

國、確實なる心は、造る心でなく生れる心である。



實 身 代 り 地 藏 物 語 (上)

貴族院書記官 石 橋 徳 作

埼玉縣の桶川に住む森喜作さんといふ人から初めて手紙を受取つたのは、もう七年ほど前の暮さざかりのことであつた。その文面によると十二歳になる長男一男君が溺死して、それ以來妻のユキさんがすつかりぼんやりしてしまひ、その態度にも不審な點が多くあ

る。このまゝでは何時子供の後を追つて不吉な事件を引き起さないとも限らない。何うかしてこの暗澹たる日常を切り抜けるために御教示にあづかりたい。こういふ依頼狀であつた。喜作さんとは勿論それまでに一面識もない名であつたが、このやうな手紙を私に寄せたのは恐らくは私が、不慮の死を遂げられた世間多くの子供達のために百萬人の寄進をつのつて一錢地藏を建立しようと努力してゐたのを知つて、薬でもつかみたい氣持から、私にたよつてきたものと思はれた。私は早速次の休日に桶川に出掛けて行き、森さん夫婦にあつていろいろとそれまでの事情を聞いた。森さん夫婦には二人の子供があつて、長男が一男、次男を昭二といつた。スラスクと育

つ子供たちを見ながら森さん夫婦は、ただ子供の生育のみを楽しみに暮してきた。その内でも長男の一男君は身體も頭腦も人並すぐれて立派であつた。親の慾目からばかりでなく、事實學友たちからは双葉山と異名をとつてゐた位で、角力では學校で一男君に適ふものがなく、その他何んの運動をやらしても大抵は一番であつた。また成績の方はこれ亦いづも優等であつた。學校の先生方も森君なら入學試験の心配は要らないよといつてはくれたものの、それでも親にしてみれば心配なことに變りなく、油斷は禁物、何處の學校が評判がよい等と云ひ暮してゐた。一方一男君の方はただ上級の學校へ進むのが嬉しく、僕は大學生になるんだと遙い將來を夢みてはとび

跳ねてゐた。また一男君は近所の者が感心する位の親孝行ものであつた。身體こそ大きい矢張り子供で、無邪氣な言葉から自然とあふれる親思ひの數々、素直に云ひつけを守る動作等を見守りながら親たちは唯もう目の中に入れても痛くないと思ふのであつた。病氣で死なれることはなからうけれど、人喰ひにでもあつて誘拐されたら一家は滅亡である。こんなことまで考へて親たちは後に證據が残るやう一男君の指紋までとつておいたといふ念の入れかたであつた。

それがある日のこと夕方になつても一男君が家に歸つてこなかつたのである。これまで親の承諾なしに夜まで外で遊んでゐたことはなかつたのだがと不審に思つて、學友たちや近所の家々を探し廻つた。學友たちは皆家に歸つてゐるのに獨り一男君の行先だけが判らなかつた。親たちが探し厭ねて疲れた身體を横にした時は夜も更けてゐた。あれこれと思ひが走つて、蒸々

する一夜をまんじりともしなかつた。夜明けをまちかねたやうにして親たちはまた一男君を探しに家を出て行つた。



家から程遠からぬ所に、家でも新築するのであらう畑をつぶして針金で圍つた一畵がある。そこは一方の隅を堀つた土で土盛りされ

てゐた。從つて松が三本立つてゐるその隅に深い池と云ふより沼のやうな水溜りが出来てゐた。虫が知らせるとでもいふのか、親たちの足は自然とその圍ひの方に向つて行つた。一步針金をまたいで、高い所に立つてみたユキさんは「キャツ」と叫んで立ちすくんでしまつた。水溜りの大池の中には、變りはてた一男君が浮んでゐたからである。

それから幾日か経つた。夜もない朝もない夢のやうな幾日かであつた。親たちは家の前をゆく通學の兒童をみるといつも錯覺をこした。もう必要のないことが判つてゐても机や本箱を整頓してやるのが淋しい慰めであつた。

その内喜作さんはユキさんが毎夜家を抜け出してゆくことに氣がついた。夜が更けてあたりが静まるとユキさんは夢遊病者のやうに床を抜け出し、音もたてずに家を出て行つた。喜作さんも急いでユキさんの後を追つてみた。いつの間にか一束の花がユキさんの手に握られてゐた。夜風に後毛を吹か

せながら誰かに導かれてでもゐるやうに星もまばらな眞暗な道を急ぐユキさんの後姿には何か凄惨な氣があつた。やがて例の大池の、

一男君を引き上げた邊に近づくと、ユキさんはそこに花を捧げて合掌し、ヂツと水面をみつめてゐた。喜作さんはおたまじやくしを捕らうとして溺れた一男君の「苦しいッお母さん」と叫ぶ悶えを耳にした。丁度その時、ユキさんはすつくと立つて「一男や」と叫んだ。喜作さんは思はず「危いッ」と、池に兩手をさしのべたユキさんを後からしつかり抱へて離さなかつた。

このまゝで行つたら何んなことにならぬとも限らぬと考へた喜作さんは、何處で聞いたか救ひを私の所に求めてきたのであつた。私はいろいろ話を聞いた。また溺れた池にも行つた。そして簡單ながら供養の同向もした。池は無難作に堀られたまゝで、危険極まるものであつた。

私は森さん夫妻に何んと云つて慰めたらよいか判らなかつた。もとより救はう等といふ

ことは出来なかつた。私はこれはお地藏さまのお慈悲にすがる外に道はないと考へた。そこで早速ながら森さん夫婦にこのことを話したところ、もとより大いにこの提案を喜んでくれた。更に私は一男君の通つてゐた學校にも行き、先生方に向つて「錢地藏の因縁やら今度の地藏建立のこと等を話して助力を頼んだ。すると先生方もすぐに賛成して下され教職員ばかりでなく生徒一同からも寄進をつのり、それで場所も學校の前に小さいながらも地藏堂を建立しようといふことに決つた。このお地藏さまは兒童たちが毎日學校への往復にお詣りすることが出来るので、修養上にどの位役立つかわからないし、一男君の冥福が祈られるばかりでなく後進の兒童たちを守り導き救つてくれるに違ひはない。それなら丁度一男君の死が皆を導くことになるから、このお地藏さまを「身代り地藏」とお呼びすることにしようといふことになつた。

それから、その翌年のこと「身代り地藏」の開眼供養を営むから私にも参列してくれと

笑話 昔、咄し集

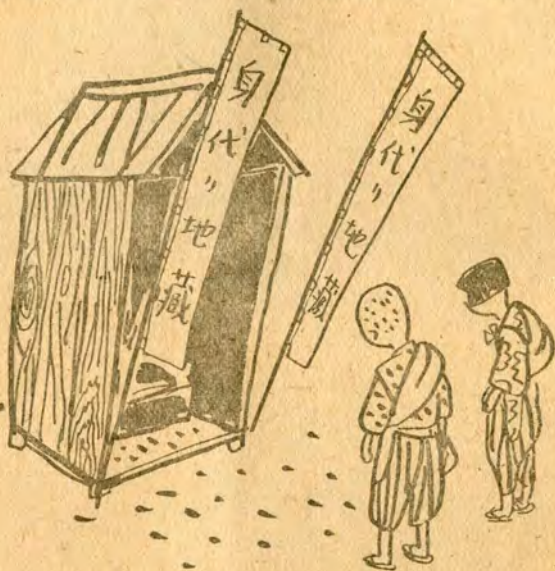
無 筆

「物もう「ドレイ」北佐野三右衛門御見舞申します」今日は旦那罷出ましてござります」
「然らば御玄關帳へ記され、お歸りの時分宜しく仰上られて下されませう」イヤ私は無筆でござります」ハテ困つた物だナア」……
「客」然らばかう致しませう」取次「どうなされます」客「参らぬ分になされて下され」
(安永二年刊、鹿之子餅)

役者の女房

芝居の詰め役者の女房打寄り、夫の歸りを待ち、四方山の噺の所へ、同じ仲間何某、役を仕舞ひて歸りたれば、中島何某が女房、目早く見て「權右衛門様お早う御座んす。わたくしが内はどうしやしたへ」アイたつた今首を斬られました」ハアそんならお汁をあたためやしよう」(安永八年刊、壽々葉羅井)

の通知を受け取つたので、學校の先生方が盡力されて、計畫も順調にすすみ、一同真心こめた地藏堂が立派に出来上つたのを知つたのである。私は自分の提案がこうして實を結んでくれたので云ひ知れぬ喜びを感じた。しかし折から議會が開かれてゐた時なので、残念ながら私は参列が出来なかつた。後になつて開眼供養の寫眞を送つてくれたので、それが如何に盛大に嚴修されたかを知つた。一男君の死もこうして「身代り地藏」となり無言の教化をたれて、決して大死とはならなかつた。森さんの家も、お地藏さまのお慈悲にすがつて、明るく朗らかな生活を取り戻したに相違ないと信じた。私はこうして禍が轉じて福となり、逆縁が變じて順縁になつてくれれば獨り森さん一家の幸せばかりでなくと思つた。



ところがはからずも私は今年になつて、この森さん一家に幸福が持ち來されたことを知

つた。それこそ身代り地藏尊のお慈悲が廣大無邊であることの證據でもあるし、深い信仰によつて暮す家が如何に明朗で、常に幸福に満されるものであるかを教へてくれた。
(つづく、文責在記者 (齋藤 清 畫))

下手な長談義

下手なる長談義の席に、齡五十にあまる女房帷巾をかつき、聴衆みなく立ちたれどもつひに一人立たず居たり。長老高座より感じて褒めんと思へる時、彼女房、唯今日めたる顔にて見あげ、「昨日の長老のまた御座る」と(寛永五年刊、醒睡笑)

いと八

昔、いの字と八の字は同じ事かと問ふものあり、さる者答へて、字は同じ事なれども、ひまなる時に書きたるは八と讀み、忙しき時に書きたるは、いと讀むと教しふ。

(萬治二年刊、私可多咄)

劍道指南所

諸流劍術指南所と筆太な看板、人物くさき侍來て、何流なりとも私相應の流儀御指南下され、御門弟に成りましたいとの口上、其のもと様は表の看板を見て、お出でござりますか「左様で御座ります」「ハテ埒もない。あれは盗人の用心でござります」
(安永二年刊、鹿之子餅)

信仰相談

(質問歡迎)

擔當 中村 辨康

念佛生活とは?

(問) お寺様から淨土を送つて下され、日常生活にまた教養に大變役立ちます。厚く御禮致します。次にお説教で「撃ちて止まんの精神を以て戦時念佛生活を行つて行かなくてはならぬ」とお聞きしましたが、もつと詳しく念佛生活のお話を御教授願ひたいでございます。

(盛岡市・油町・鈴木三郎)

(答) 詳しくと云ふ御注文ですがそれは少し御無理ですから簡単に申し上げます。

但し御話の「撃ちて止まんの精神を以て戦時念佛生活を行へ」と云ふ言葉は大分矛盾して居りますやうに思ひます。これは「念佛に依つて撃ちてしまふの精神を強固にし以て戦時生活を充實すべし」と云ふ意味であらうと存じます。随つて何う云ふ理由から、念

佛の信念に依つて必勝完遂の精神が養はれるかと云ふことを申し上げたらよろしからうと存じます。

先づ第一に大東亞戦争を勝ち抜く爲に最も必要なものは何であるかと云へば「自我主義をなくすこと」にあると存じます。謂ゆる無我になつて御國につくすことこそ第一要件であります。然しこれは中々容易のことではありません。事毎に不平不満が出て來ますし、また實際生活として暗や横流れが出て來ますし、色々配給制度がまだ確立して居りませんから、そこに雑多な葛藤を生じて中々うまく行かないものがあるやうに思ひます。國民一人々々が時局を認識したらうまく行けさうなものですが、生活と云ふことになる別な考へが出て來て「自分」と云ふ觀念が事毎にそれを邪魔致します。誠に淺ましいことですが、現状ですから仕方がありません。然し之

ではなりません。何うしてもかゝる氣持や行爲は殲滅させなくてはなりません。然かもその方法としては佛教で色々説いて居るけれども、結局は念佛より外にはないと思ひます。この念佛に依つて大みいのちの中に往生する氣持こそは眞に「自我主張」を消除され得るものと思ひます。

また念佛は「一」を堅持して行くものでありまして、この單純な念佛を持続することはおのづから「一」を貫く氣持を養つて居るのであります。外見は左程でもありませんが、ねばり強く物に屈しない強靱な精神を涵養して行くものでありますから、その意味から云つても「撃ちて止まむ」の心を強固にすることが出來ると思ひます。随つて戦時生活を充實することが出來ると存じます。

死靈のたり

(問) 人が死ぬと魂が家の軒場に居て、一七日とか三七日とか又は三十五日とかに去つて何處かに生を得ると言ひますが、そ

これは本當ですか。

またお葬式に家の入口から出さないのは何う云ふ譯ですか。また葬式が終つて家に歸る時、水と火を置く譯は何う云ふ譯ですか。四花ばなを二つ立てるのは何う云ふ譯ですか。

また八か六かお經にありますが。

また田植の時に死人が出るかと白枯れするから田植がすむまで火葬にして寺に預けまうし、また種子まき前に死人が出ると種子が死種になると言ひますが、そんなことがお經に書いてありますか。

(青森・平館村・丸尾久一)

(答) 人がなくなつて四十九日の間を申陰又は中有と申しますが、それは一七日乃至おそくも七々日には後生が定まると申します。誰も見たものはないのですから、そんなやうになるかならぬか知りませんが、佛教では数字の取扱ひ方に三通りあつて、一、十、百、千、萬と云ふやうに十進進む「進法」と



四、八、十二、十六、二十四、

三十二、三十六と云ふやうに四の倍數で數へる「倍法」と、七、二七、三七、五七、七七と云ふやうに重ねて行く「重法」とあります。

が、死者への追善は七の數を用ひます。即ち「累七追善」と云ふもので、七を七回繰返した七々日を以て中有中陰の満了としたのです。随つてこの區切り／＼に次ぎの生が定まるものとするやうになつたのであらうかと思ひます。

次に死人を家の入口から出さないといふことですが、入口とは表口の意味でせうか。すべての入口から出さなければ窓からでも出すのか、私共の方にはさう云ふ風習はありません。尤も頭から出さないで足から出す習慣があります。全國的のものではないでせうかね。理由は存じません。次に葬式後に家に歸ると水と火を置く習慣は、水も火も共に清めるものですから穢れを清める意味でせう。私の方では盃へ水を入れて門口に置きます。

すると、それへ足を入れる恰好をしてから皆な家に入ります。火は置きません。尤も死骸を送り出してから灰と鹽とをまく習慣もあります。之れも清める意味でせう。

四花ばなは釋尊が、拔提河のほとり沙羅双樹の間で入涅槃なされた因縁に型取つて四花ばな一對を立てるものと思ひます。

「八」か「六」かとは何のことですか意味が分りません。

次に田植のこと種子のこと、そう云ふ習慣は寡聞にして知りませんが、田植の時は忙がしいから、葬式をゆつくり農閑期になつてから營むやうに、わざとそんな難癖をつけたものかと存じます。種子のことはその變訛でせう。そんなことは他地方には通用しません。無論お經には無いと思ひます。

正坐と端坐の區別

(問)

誠に愚問で恐入りますが、正座と端座との坐し方の相違を御教へ下さい。端座は坐禪の型ですか、一寸心するところがありません。御教示願ひます。(大阪・赤川・島田)

信仰相談

(答)

正坐と端坐と別段

の區別はないと存じます。正坐と云ふのは日本流の言ひ方で、支那では正坐のことを端坐と云ひます。ですから漢譯のお經には「端坐」と言つて居ります。そして印度流の端坐は謂ゆる結伽坐で、坐禪のすはりかたですから、支那流の端坐とは異なるのかも知れませんが、序に申し上げますが「坐」と「座」とは同じであります。今では「座」の方は名詞に用ひ「坐」の方は動詞に使用して居ます。ですから「正しく坐する」と云ふ意味で「端坐」と「坐」の字を使ふのがよいと思ひます。

坐禪にはシヤマタとビバシヤナとあつてシヤマタの方が精神を統一して心を動かないやうにするものです。安般觀と云つて息を一つ二つと十まで數へることを二回やつてあとは鼻端に心を止めて靜かに呼吸を平常の通りにやつて精神を動搖せしめないのです。日本人としては普通のやうにすはつて(頭頂を四五

寸あける)脊筋をまつすぐに半眼にして前方四五尺の處を見る如くにするのです。或は半伽坐にして尻に蒲團をあてゝすはるのもよいでせう。私共は門外漢ですから委しいことは存じませんが、馴れない間は肩が凝つて來ますし足がいたくなつて來ますし、中々骨が折れるやうです。そこになると念佛の方はいかに安樂道であるかよく判つて有難くなります

生飯や團子の始末

(問)

米の増産をやかましく云ふ今日になほ法要の時、米や飯を捨てるのは勿體ないと思ひます。世間では節米せよと言つて居るのに、お米で御團子を作りお飯を墓場上げつばなしにするのは勿體ないからと、墓場から下げて來ると禮家の人から惡口を言はれるから下げることも出來ず、そのまゝ捨てゝ

雨風にたゞかれくさつてしまひます。また寺で團子やお菓子を子供にやらうとしても貰ひたがりませんが何う云ふものですか。また追善のなむけとして水の中に御飯を入

れて「サンバラ」の文句を唱へて居たら佛様に飯を手向けたことになるのでせうか。戰爭の場合だから、佛様の供物も無駄にならないやうに改めたいと思ひますから正しい法を教へて下さい。

(青森・愛讀者)

(答)

御墓に上げたものは下げて家畜などにやればよいと思ひます。惡口を言はれるかも知れないと恐れをなして、そのまゝにして捨て置くのは御設の通り勿體ないことです。子供がお寺のものを貰ひたがらないとのこと、それは地方によつて異なることでせう。私の地方ではそんなことはありません。水の中に御飯を入れて「サンバラ」の文句を唱へることは、よく飯鬼飯又は生飯と云つて、七粒ほどの御飯を水に入れ「施食儀」を唱へて飯鬼に施すために外に捨てます。そのことを言つて居られるのでせうが、今ではあまりやらないやうです。老僧などは昔師匠がやつたので、その習慣を守つてやつて居られるやうですが、あなたの方で若しやつて居れるならば鶏などに呉れたらよいでせう。



不朽の劍の道

劍道教士 林 東 軌

明治天皇御製

わが國は神のすゑなり神まつる

昔の手ぶりわするなよいま

畏くもこの 御製の御精神によつてわが國

不朽の劍道の心は云ひつくされてゐるのである

申すまでもなく劍道の淵源は極めて久遠

であり、その道の高尚なることはわが國體を

扶翼すると共に萬世不朽の武士道に貢獻して

きたのである。また劍道はわが刀劍鍛冶の術

が進歩するに従つて心身を鍛鍊するの道とし

て發達してきた。奈良、平安、鎌倉、室町時

代を経てから徳川時代に至るまで、劍道の奥

儀を究めた者が續々と輩出した。河々流と稱

して二百餘流の劍法を見ることゝなつたが、

これは何れも精神の修養、士道の發展を基礎として苦修精練したものの結果に外ならない。特に徳川時代にはこの精神が武士の精神界を主宰し、道徳を維持し、行爲を規定してゐた。わが國特有の忠君愛國とか義勇奉公といふ精神を養成してきたものである。

×

現代の劍道は勿論武技を練習することも重要なことになつてゐるが、それより劍道によつて精神を修養することに中心をおいてゐる。劍道の修行は心身の鍛鍊であるから、修練中に炎熱を避けることなく酷暑を厭はず、

かへつてかゝる寒暑の最も激しい時を選んで

修行をすることがよいとされてゐる。そして

あくまで禮儀、廉恥を砥ぎ、武徳を涵養する心構へが大切である。

先づ第一に、一度劍をとつては水火も辭せず、鐵壁も碎かずにはおかぬ攻撃精神を鍛鍊するのである。それ同時に、忠勇義烈なる精神を養つて敵手に對しても常に姿勢態度や禮儀を正し、しかも満身の力を注いで向ふのである。旺盛なる氣力と沈着なる膽力を以て、敏捷輕快に動作をし、耐久力を養つて、國家の中堅たる國民となるといふ自覺が要るのである。

これらの精神も、しかし武技と離しては考へられず、武技の向上に従つて己が人格も磨かれるのである。昔から竹刀を持つて學ぶ劍道を、役にもたたぬものとして輕視するものもあつた。即ちこれは眞劍をとつて戰場を馳驅するのに、竹刀を振り廻す術等はその用をなさぬといふのである。

×

道場での武技の修練は、前後左右に身體を自由に振舞ひ敵手のすきに乘じて勝を制する

のである。しかるにいざ戰場に出陣しての戦闘では、若し右へ開けば馬に邪魔され、左へ避ければ戦友と衝突するし、後へ下らうものなら友軍の槍先に突き貫かれるといふのである。従つて出陣の経験を多く重ね、戰場での切り覚えが眞の武技であるといふのである。

黒田一成といふ人が、某劍客と試合をして、劍客の打ち込む竹刀を左の手で受け止めてしまつてから劍客を打つた。劍客が驚いてそんな無法なのがあるかと憤ると、拙者の劍法は常からこゝろなのである。嘘か何うかこれをみよ」と、籠手を出してきて劍客に見せた。すると成る程、鐵の籠手の上には刀の斬傷が幾つかあつたといふ。

これ等は如何にも興味深い話で、戰場では道場で學ぶ劍道と異るといふ例である。しかし斯るが故に道場の劍道は役立たぬといふことにはならぬ。何故ならば劍道は人格修養といふ大目的のあることを等閑に附してゐるからである。

これは宛も軍事教練に於て諸基礎動作を學

ぶのに、軍紀教練の名があることによつても知らるる通り、これら基礎訓練はそのまゝ戰場に用ひることがないにしても、尚且つその教練の重要さには少しも變りのないのと同様である。劍の妙技を修得するには、唯技だけを如何程鍛錬するも、そこには達し得ぬものである。

×

山岡鐵舟の師は淺利又七郎といつて一刀流の名手であつた。もうすでに相當な技を備へてゐた鐵舟であつたが、又七郎の前に出ると身體が畏縮してしまひ、立ち向つただけで敗けてしまつた。鐵舟は又七郎の妙劍は決して抜だけのことではない、心から出たものであると氣がつき、人に勝つのは業ではない、人間の徳だ」といふことを知つた。

それから鐵舟は禪の修行に精進した。いろいろの名稱知識について苦修を續けた。そして最後に京都の滴水和尚といふ僧の下で學んでゐた時、豁然と開悟したのであつた。それは鐵舟が又七郎に入門してから二十三年目の

ことであつた。二十三年の苦心修行によつて鐵舟は初めて師又七郎に打ち向ふことが出来た。

後に西郷南洲が鐵舟を評して、命もいらん、金もいらん、名もいらんといふ人間だといつたといはれてゐるが、鐵舟のこの大人格は劍道修練の間に積まれた武徳による所大いといへるのである。

鐵舟が十五歳の時に記したといふ座右の銘に、君父母師の恩を忘るべからず、神佛並に長者を粗末にすべからず、名利の偽に學問技藝すべからず、己の善行を誇り顔に人に知らしむべからず、總て心に取ちざるに努むべ

篤志寄附者芳名

左記の通り本會活動資金にと篤志寄附下さいました。深く御禮申し上げます。

金五圓

東京都芝區高輪臺町二八

石橋徳作殿

金二圓

福岡縣八乙郡水田浦町

近藤ハル殿

し、等々の句を見ることがよつて、鐵舟の幼年の頃から並々でなかつたことが十分に知悉されるのである。而して後年鐵舟の教訓といふのに、

金を積みて子孫に遺すも、子孫必ずしも守らず。書を積みて子孫に遺すも、子孫必ずしも讀まず。陰徳を冥々の中につみて、子孫長久の計を爲すに如かず、

とある。よく鐵舟の高潔無垢なる人格を表してゐて、眞の武人といふべきであらう。

x

よく云はれる言葉であるが、皮を斬らせて肉を斬れ、肉を斬らせて骨を斬れといふことは蓋し劍道の眞隨にふれてゐる。よく試合等で相打ちだつたといふが、若しそれ眞劍の場合なら決して相打ちはないのである。双方が傷を負ふ位の相打ちならあらうが、双方が顔を割られ胴を斬られて同時に相果てることは絶對にあるまいからである。

武藏が巖流と船島で試合して、巖流を倒すと同時に己が頭の鉢巻を斬られてゐたといふ

話も、竹刀の試合なら相打ちであつたらう。また宗矩がある武藝者と試合をして、その武藝者を倒すと同時に自分も脇の下に着物を二枚まで斬られて相手の刃が襦袢で止つてゐたといふ話もこれと同じであらう。

かく劍をとつての試合には勝敗の二途しかなく双方分れる場合はないのである。戦争に於ても全く同様勝ち以外に戦ひの終局があらう筈がない。職責をつくすことも矢張り同じ事で、切腹以外にそれを償ふ手段がないとするのが武士道である。

劍の道はわが國とともに古く、發展し來り、またわが國とともに新たなのである。

劍道をして時代に順應しつゝ更に進歩せしめなければならぬのは、現代人の責任であると思ふが、もとより容易なことでない。これは丁度書道が王羲之

や顔真卿、小野道風といった人々を手本にして見習つてゐるやうに、劍道も亦昔の達人に見習つてゐて、しかもこれを凌駕するは勿論のことその程度まで容易に近づくかない。劍道は昔の達人の域に追つくべく努力することが先づ必要であらうが、更に今日の進歩を考慮して精進を續けてゆかなくてはならぬ。現代ますます劍道を旺にすべきは、唯戰場に於て十分の働きをなさしめるばかりでなく、義忠奉公の心を養ひ粉骨碎身まづ躬を以て難局に當る當千の士を養成するに缺くべからざる途である。

椎尾辨匡・中村辨康序 林 靈 法著

新刊 法然上人を憶ふ (本會で収次ます)

B 6 版四四〇頁 實費三圓 (送料共)

著者は思想上に懷疑煩惱を續け、遂に凡入報土に救はれた體驗を通し、告白と懺悔の内に法然上人の教義をつつた。

申込所 法然上人鑽仰會

東京都芝區芝公園明照會館
振替東京八二一八七番

宗 教 隨 筆

とんちん

糸山天真文



物 語 のん坊 畫

夕陽も落ち様とする、うすら寒い晩秋の夕暮、餘り風采の上がらぬ老人が、お巡りさんに後を追掛けられ乍ら、街の路上を小走りに走つて行きます。

「あゝ若し／＼いかにぢやないですか、今拾つたものを、すつかりお出しなさい」

「大したものでは無いんで」
「大した物も蜂の頭も有りません、さつさとお出しなさい」と語氣も荒々しく咎められております。

「お恥しい次第で!!」と老人には似ははぬ照れ臭相な顔で云ひ乍ら、袂から出て來たのが何と硝子の破片、

「えゝッ之は一體何にする積りで」
と氣狂々とも思つたのでせうか、お巡りさん

は、老人の顔と硝子の破片を見比べ乍ら怪訝な顔して老人を見つめてゐます。

「は、はい、御覽下さい、裸足で遊んでゐる、彼の子供達を、若しも怪我でもしては大變と思つたものですから!!」

「ウーム成る程ねえ、お互に氣をつけませう、失禮しました」と交々に微笑さえた／＼え、後を振り向き／＼幾度か禮を交し乍ら右左に分れて行きます。

人が追ひ掛ければ追ひ馳ける程、小走りに走つて行く、少つと糸目氣のある老人こそ、とんちんの老師なんです。

「懷中は曇り勝ちでも、正しい事をしてゐれば、お咎め受けても、いつも心は日本晴で喃」と誰に云ふとは無しに、そら嘯く豚珍の老師です。

硝子の破片ばかりでは有りません、古釘、鐵屑、勿體ないと思ふものは何でも構ひません、何時何處でも拾つて來ます。拾つて溜つた古釘等を眺めて獨り悦に入つてゐます。丸で屑屋の代理店と云ふ格好ですが、變つてゐ

るのは、元が無料で仕入れたものだけに誰か無斷で使つても之ばかりは文句を云ひませぬ。天下和順な風景です。

變な道樂ですが、時には金物屋に釘が切れた時や急場に、差當り間に合つて、買ひに行く手間が省けて至極重寶する事も有ります、何かの用で老師のお供をする豚珍や竹林にとつて、街端で通り掛りの人、殊に顔見知りの人達に、自分が拾ふのではないにしても、其の姿を見られるのが、まことに氣まりが悪いのです。

そんな工合ですから、働かないで喰ふ事が、優れたものゝ特權でもあるかの様に、まぢがつて考へられ勝ちだつた其の當時でも、老師にとつて勞働、勤勞等は何の苦もなければ、全くの朝飯前です。

自坊の境内でさえ廣くて掃除に容易でないのに、頼まれもせぬ附近の溝の清掃から、道路の凸凹の地慣し迄、暇さえあれば、休みつこなしにやるので、豚珍も竹林も些か僻易の體です。

梅檀は二葉より芳しと云ふのでせうか、後年博士號迄戴く程の竹林、そつと目下の豚珍の耳元にささやくのです。

「豚ちゃん、寺の老師ね、何日も吾々を呼ぶのに呼捨たらふ、それが、ちゃんだとか、さんだとか、たま／＼吾々の名の後につけて呼ばれる時は御機嫌がいゝなと思ふと豫算が違ふよ、概して用を云ひ付けられる前振れと思つて間違ひないな。そんな時はお互ひに警戒を要する。大體、寺の老師は、何でも勿體ない／＼勵け／＼と云ふが、世間體と云ふものがある。決して勤くと云ふ事が一概に悪いと云ふのでは無いが、汗水流して一生人に使はれるより、涼しい顔して人を使ふ人間になる。所謂、之からは頭腦の問題だな」と知つたかぶりで自分の頭を人指し指で二三度軽く叩きました。

もつとも竹林豆和尚は今やニキビ華やかなる中學三年生の生意氣盛り、無理も有りません。

仲々勉強好きな竹林「AプラスBプラス」

と盛んに數學の方程式を解いております。片や豚珍、並べられた隣の机で竹林の學校の習字の宿題をせつせと代行してゐます。豚ちゃんの來年中學入學試験の勉強の手傳ひを僕がする。姓は名を記するに足ると云ふわけ



で僕の習字の宿題を豚ちゃんがする。之で相互扶助と云ふ奴だと竹林の勝手な理窟を豚珍は成る程と眞に受けて、之も心臓物で中學生のやる習字を小學生の下手藝な字で、のたくつてゐるのですから之亦いゝ氣なものです。

「豚ちゃんや、竹林さんや」と老師の平素聞

き慣れた聲より優しい聲が聞えて來ます。「ハハアーイ」と遂々お出でなすつたと兩人顔を見合して、境内の地慣し、附近の溝掃除が始まります。嫌々乍らやつてゐる事です。仕事は餘りハカがいきません。夕暮になつて、やれ／＼と、シャベルも鋤も、柄杓も、洗ひもせず、さつさと其のまゝ物置へ、もう今日一日は勤勞を仰せつからぬ安堵で、兩人とも後は夕飯のお菜の何であるかを考へてゐます。

老師は小言も云はず泥の着いた道具を出して井戸端で丹念に獨り泥を洗ひ落してゐます。皮肉だなと思つてゐる様な顔して「明日も使ふんですから」と云ふ竹林と之に同感の意を表してゐる様な豚珍の顔を軽く見洗ひ乍ら「わしもな、若い時はお前達と同じ様な氣持で随分と始終師匠に吃言を云はれ通したつた。或る時はこ五月蠅師匠と恨んだ事も有つたが、段々と老ひ込むにつれて師匠の有難さが身に沁みて」と冒頭して感激の瞳を濡はしつゝ老師は語り續けるのです。(其の五)

にはいれないと、まごまごして居る人が澤山ありますが、それはいくら骨折つても木に依つて魚を求めるやうなものであつて駄目であります。有るか無いかの問題ではありません。感じられるか感じられないかの問題であります。感じられないのは自我を突つばつて居るからであつて、自分で眼をつむつて居るやうなものですからむしろあたりまへであります。本當に素直になつてしまへば直ぐ感じられる筈であります。疑ひなくうら思ひなき精神状態こそ、信仰心の理想的な心境です。しかもさう云ふ人でなくては信仰には入れないのであります。

元來法藏菩薩の四十八願は天地の大道を顯はしたもので言はゞ宇宙大意志の發露であり發現であります。宇宙の大法藏を開いてそれを言葉に表はし四十八條に細別したものでありますから、單なる一法藏と云ふ人の「願」ではないのであります。法藏の身體をかりて現はれた宇宙的大意志であり、法藏の心を通して表はるべくして表はれた宇宙の意志欲そのものであります。

ですからその大宇宙意欲に應同する心でなくては「本願に乗する」ことは出来ないであります。しかも大宇宙の

意志は純粹に正しいのでありますから、それに應ずるには素直に純な心でなくてはなりません。

この純な素直な正しいこゝろこそ「深心」であります。この素直な信が即ち「深く信するこゝろ」で、この外の何物でもありません。ですから何んな人が來て「お前のこゝろはまちがつて居る」と言つたところで、ぐらつくものではありません。經綸の文句を引いてその證據にしたところで、それは何の役にも立ちません。眞理に二も三もある筈がないからであります。たとへ釋尊の如き「佛」が來て「お前の心は間違ひで正しい信仰でもなく淨土に往生することは出来ない」と批難したとしても、そんな言葉で空しく消え去るやうなものではありません。それほど深いものであります。

ですから、深心であり深信であります。一見深くないやうに見えますが、それは決して浅いこゝろではありません。私達は自ら省みて自分の信がこのやうに純か純でないかを検討して、若しさうでなかつたならば、よく／＼念佛してもつと／＼自分を反省し、自分の無力に痛感し、如來の大慈悲をシミジミと希ふべきであります。

編輯後記

◇軍事接護強化週間が催され、本會でも微力ながら接護事業を強化すべく計畫いたしました。この種事業は外見より内容であり、永續しなければ意味がありません。

◇東京失明傷痍軍人寮長の千葉正一氏が入寮者に先づ云ふ言葉は、君達は傷痍軍人記章をとつてしまへ一人の人間として起ち上れといふのださうです。思はず様を正さずにはゐられません。安價な同情口さきだけの接護は「毒藥口に甘し」であつて、心ある勇士は甘やかされたくないと云つてゐるとのこと、さすがはと感銘いたします。◇今後は適齡以上の學生がゐなくなりまして、當然のことでありませう。國の興廢をかけての聖戰遂行中に、前線に立てる身體でジツト學窓に學んでゐられるものであ

りますまい。男も女も、老ひも若きも擧げて突撃に移るべきは再三申し上げた通りであります。

◇貯金に増産に銑後の責務も重大であります。戦争はもとより容易でないのが當り前で、國難に逢へば遙ふ程奮起してゆきませう。

◇國民座右銘が一日一句づゝ決められました。その中で十月四日の句に「身はいやしくて心はたかく有りなん」との宗祖のお言葉があります。又十一月一日の句として、とにかく平日なぐさみのやうに讀書すべし」との福田行誠上人のお言葉が見られます。

◇吉田綾二郎先生から御多用中を玉稿を頂き深謝いたします。

◇佐藤春夫先生は軍報道部長として〇日南方の基地に向け出發されました。昔の俗謡に南の端と唱はれた所に行くのに、一寸そこまでと身輕に行かれたのも先生らしく又昔の教へ子（現地人）があるの

で、それを訪ねることを大きな樂しみにしておられました。

◇岡本一平先生は大變お忙しい様子なので、何の御用事かと聞けば、町會の副會長でね、と仰る。色々お話を伺ふと町會には先生がゐなくては困るらしい役割を務めてゐられる。先生がこうして活躍されるのも成程と存じました。

◇和田正系先生は先頃まで富浦町の壯年團長に就かれてゐましたが、頼まれれば曠とは云はない先生のお人柄が町のため各方面に互つて御活躍させてゐます。

◇石橋徳作先生は新聞その他で幼兒の變死者があると聞けば、すぐお見舞ひに行かれ、これまで先生によつて更生した親たちが何の位あるか判りません。身代り地蔵物語」はその一例です。

◇「信仰問答」は都合により刊行が遅れてゐますが、豫約だけで賢切れさうになつてゐます。（村瀬）

淨土 十一月號

昭和十年五月二十日

第三種郵便物認可

昭和十年十月十日印刷納本

昭和十年七月一日發行

（定價十二錢）

東京都芝区芝公園十五號明照會館

編輯兼發行人 眞野正順

東京都芝区芝公園十五號明照會館

印刷人 赤尾光雄

東京都芝区芝公園十五號明照會館

印刷所 大日本印刷株式會社

配給元

東京都芝区芝公園十五號明照會館

日本出版配給株式會社

發行所 法然上人信仰會

東京都芝区芝公園明照會館内

振替東京八二一八七番

會員番號二三〇〇〇七

「淨土」購讀規定

定價 金十二錢

（送料一錢）

會費 金一圓五十錢

一ケ年 （送料共）

刊 近

信仰問答

賣價三圓十五錢

送料十五錢

總ゆる難問疑義に明解を與へた活きた信仰案内書

著者が「淨土」誌上に創刊以來擔當してゐる「信仰相談」は各方面に非常な好評を博してをります。それは問ふ者は切實な信仰上の悩みや疑ひをぶちまけ、答へる者はそれを親身になつて懇切に指導してゐるからです。今こゝにその「信仰相談」中の主なもの約二百を選び系統的に配例して一冊の書物としました。故にこれは懇切な信仰の案内書であり、最も平易に書かれた佛教讀本であり佛教辭典でもあります。著者の公正な立場は淨土宗たると他宗たるを問はず、信仰を求め、教義を探らうとする人たちを首肯せしめるでせう。

るすとなら知つ且き聞がも誰
興るた々津め集をみの題問
るへ興を針指の仰信に内の味

昭和十年五月廿日第三種郵便物認可（毎月一回一日發行）
昭和十八年十月廿日印刷納本・昭和十八年十一月一日發行

淨土 第九卷 第十一號

停
 定價金十二錢
 送料
 一錢
 滿鮮臺等
 金十三錢
 外地定價

館會照明園公芝區芝都京東
番七八一二八京東替換

會仰鑽人上然法 所行發